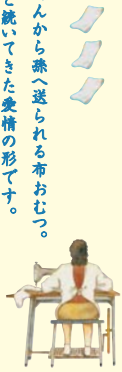


布おむつ、愛情ふかふか

いなかの母から袴物が届きました。包みを開けると布おむつが50枚、きれいにたたまれて入っていました。わが家初めての赤ちゃんが生まれて3カ月になります。お産から退院まで、10日あまり付き添ってくれた母は、産褥にこう言いました。「さあ仕事、仕事。わたし、急いで帰らなくちゃ」母の急ぎの仕事って何だろうと思いましたが、この布おむつを縫うことだったんですね。

おむつに添えて手紙が入れてありました。「赤ちゃん、大きくなったことでしょう。とても会いたいです。きょうはわたしが夜なべで縫ったおむつを送ります。いまは便利な紙おむつの時代だから、かえって迷惑かなとも思ったのですが、あなたが生まれたとき、母からおむつが届いたことを思いだし、それで、やっぱり送ってあげようという気持ちになつて、せつせとミシンを踏みました。わたしが嫁入り道具で持ってきた足踏みミシン、まだまだ元気に働いてくれています。わたしの母は手縫いでしたから、大変だったでしょうね。これから寒さに向かいます。赤ちゃんに風邪などひかせないようにね。暖かくなったら、会いに行きたいと思っています」

母の布おむつはふかふかしています。赤ちゃんのお尻に、とてもやさしそう。お洗濯がらよと大変だけど、愛情がいっぱい込められた手作りのおむつ、これからは、紙おむつと上手に使分けたいと思います。母は、一人暮らしになって10年になりましたが、働くことが生きがいで、公園の清掃や花の植え替え、通学路での誘導など、ボランティア活動に忙しい毎日を送っているようです。余った布で雑巾を100枚縫って、定期的に小学校に届けたりもしていて、先日は地元新聞で紹介されて、恥ずかしそうでした。そつと、おむつに挟れていると、急に母の顔が見たくなりました。そつとだ、勤労感謝の日に会いに行こうかな。働き者の母にびつたりの祝日ですもの。3連休だし、主人も一緒に、赤ちゃんを見せに帰れば、母はどんな顔をするかしら。



おばあちゃんから燕へ送られる布おむつ。ずつとずつと続いた愛情の形です。手縫いから足踏みミシン、そして電動ミシンと変わっても、込められた愛情は変わりません。県民共済も時代と共に歩みながら、暮らしを守る保障であり続けたいと願っています。

218万人の長野県民のために――。



助けあいの心から生まれた保障 県民共済

読者からのお便り
「わが家のずっとずっと続く」
ホームページに掲載しています！
くわしくは長野県民共済ホームページ
「広告ギャラリー」をご覧ください。

ご家庭で「続けていること」「続けていきたいこと」を募集しています！
このずっとずっと続くシリーズも早いもので今号で26回を迎えました。情報の氾濫の中で、とかく失われがちな日本古来の習慣や、家族の絆、などなど、「ずっと続いていたもの」「ずっと続けていきたいもの」をテーマにしてドラマを撮ってきました。そこで今回みなさまのご家庭で「続けていること」を教えてください。これから「続けていきたい」ことでもOKです。例えば、お父さんとの交換日記とか、おじいちゃんと孫の間のランニングとか……。お寄せいただいた原稿は今後の新聞広告やホームページでご紹介させていただきます。